

コソボでの国際展マニフェスタ14プリシュティナ

——芸術的介入、アーカイブ、語りを通した市民参加のメディアーション

石 谷 治 寛

本論考はコソボのプリシュティナで行われたマニフェスタ14の報告である。二〇二二年には、コロナ禍による渡航自粛が明けて、海外の国際芸術展の状況が戻りはじめた。欧州では、ドクメンタ15やヴェネチア・ビエンナーレ、ベルリン・ビエンナーレなどさまざまな国際展が行われ話題になったが、マニフェスタ14もそうした国際芸術展のひとつである¹⁾。本稿では、マニフェスタ・ビエンナーレの特徴を確認したうえで、コソボのプリシュティナで開催された意義とその創造的な実践について、次の点に注目しながら報告したい。

- 1、民営化される都市空間への芸術的介入、
- 2、ローカルな文化実践の再構築、
- 3、多様な記憶の語りを生み出すための場の創出、

という三つの課題に即して述べていく。

マニフェスタ・ビエンナーレとは

マニフェスタ・ビエンナーレは、冷戦崩壊後に続く欧州の再統合の過程に合わせて、二年毎に異なる都市での開催を目指した芸術プラットフォームである²⁾。第一回目の一九九六年はロッテルダムで開催されたが、その後、ルクセンブルク（一九九八年）、リュブリャナ（二〇〇〇年）などの小都市から、フランクフルト（二〇〇二年）、サンクトペテルブルグ（二〇一四年）、チューリッヒ（二〇一六年）といった重要なコレクションを有する近現代美術館のある西洋美術史に馴染みの都市まで、さまざまな地域で行われてきた。アムステルダムを本拠地に発案者ヘドウィグ・フィジエンによる監督のもと、おおむね主流となる文化的中心部とは距離を置きながら、新たな文化地図を描きだすことを目標にしてきた。特に二〇一

八年開催のパレルモでは、統括ディレクターをクリエイティブ・メディアエーター（創造的媒介者）と呼ぶようになった。このマニフェスタ12では、建築家イポリット・ペステリーニ・ラパレリが、パレルモの文化地理学的調査を行い『パレルモ・アトラス』として出版した³。これには欧州の移民の移動から、住人の文化的背景や植物種の多様性、都市の歴史の変容、映画に描かれた表象文化、さらには、近代の文化遺産や廃棄され建設の中断した建物などの地理学的調査までを、豊富な地図やダイアグラムや写真によって視覚化している。その調査を基盤に、活用されなくなっていた建築空間を会場として、「流れる庭園」、「管理外の部屋」、「舞台上の都市」という撞着語を用いたタイトルで、エコロジ、情報テクノロジ、市民参加をテーマにした作品展示やイベントが街全体に広げられた。この第一二回目からマニフェスタは、未活用の都市空間を調査し、新しい文化環境を創出するリサーチを基にして芸術実践を行うプラットフォームとしての組織改編を行なっていった。第一三回のマルセイユでは、コロナ禍とエコロジ危機に直面して、従来型の国際芸術展とは異なる課題として、ますますローカルなコミュニティに密着しながら、領域横断的な知識と調査を生み出すことを目指している。キュレーターチームを中心としたトップダウン式ではなく、ボトムアップ式を重視し、ディレクターをクリエイティブ・メディアエーターと名付けて調査・展示プログラムの統括を行い、国際的な

アートワールドのサーキットの中で活躍するアーティストを招集するだけでなく、ローカルな文化芸術コミュニティの創造性の促進を重視するようになったのである。こうした新しい文化芸術実践を目指す姿勢は、出品作家や作品の展示というフォーマットに代わって、都市空間へのインスタレーションやイベントを「芸術的介入（アーティスティック・インターベンション）」と呼ぶことにはつきりとあらわれている。マルセイユで行われたマニフェスタ13には、コロナ禍の状況で欧州への渡航が難しく、著者は断念せざるをえなかったが、二〇二二年にプリシュティナで行われたマニフェスタ14は、こうした新たな課題を試す地として格好の舞台になった。

コソボ紛争から四半世紀を迎えつつある街の国際展

バルカン半島に位置し、プリシュティナを首都とするコソボは、二〇〇八年二月一七日にセルビアから独立した欧州で最も若い国である（図1）。セルビアとその友好国からは独立を承認されておらず、コソボ人は、欧州に出国の際もビザを必要とする。日本は、コソボの独立を早くから承認しており、現在九〇日以内の滞在の場合にはビザが免除されるので、日本人にとっては諸外国からに比べて渡航しやすい。

歴史的経緯から、バルカン半島のセルビア人とアルバニア人の対

立は根深く、一九九〇年代のアルバニア系住民が多くを占めるコソボ自治権の剥奪と、セルビア統治下による抑圧の経緯を経て、冷戦崩壊後のユーゴスラビア解体にもなう紛争、そして一九九八年からコソボ域内のセルビア人保護を名目になされた軍事占領、それに対するNATOと



図1 新しい国を表すシビック・プライド背後には「若者とスポーツ館」などの施設があり、マニフェスタ14の看板も設置された。

アメリカ軍による軍事介入による空爆によっても被害を受け、アルバニア系およびセルビア系双方から多くの難民が生まれ市民が犠牲になった。軍の駐留下で人身売買も増加したことが指摘されている⁴。日本政府は一九九八年にはじまるコソボ紛争で発生した難民の支援を宣言した経緯がある。紛争終結後は国際連合の監視下に置かれ、独立後もNATOの治安部隊が駐留しているが、セルビア系住民の多い北部地域での緊張が燃っている。この紛争の歴史的記憶は市内にあるビル・クリントン像に記念されている。国民をイデオロギー的に統合していた社会主義国家の解体とそれともなう民族主義の台頭、異なる民族主義グループ間の対立、そこに欧米・ロシア双方による軍事支援による緊張の激化、市民の保護という名目での

軍事介入による紛争の泥沼化という周知の構図は、かたちと場所を変えながら二〇二二年二月から激化しているウクライナ紛争まで反復され続けているように見える⁵。その意味でもユーゴスラビアの紛争の歴史をいま振り返っておく必要がある。一九九三年に設置された旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷は、民族浄化や集団レイブなどの紛争下における戦争犯罪をいかに裁くことが可能か、という問いをあらためて国際社会に突き付けた⁶。プリシュティナの中心街には、戦争で犠牲になった女性の数の二〇一四五個のメダルで作られたヒロイン像が設置され、近い過去の悲劇的な記憶を哀悼している(図2)。二〇〇〇年に東京で開催された女性国際戦犯法廷もこうしたユーゴスラビア紛争から生じた問題提起を、日本の歴史における戦争責任の問題に接続しようとするものだった。その論争後に複合的に抑圧された記憶が、二〇一〇年代末の日本の文化芸術の表現の自由をめぐる論争として回帰し表出したことも思い起こしておきたい。

一九九〇年代のユーゴスラビア紛争の歴史を傍らに、マニフェスタ・ビエンナーレは、欧



図2 右手に「ヒロインたち」の記念碑、左奥にグラントホテル・プリシュティナ。

州の各都市の変化を見届けてきた。そうしたなかコンボは冷戦崩壊後の紛争と軍事介入の歴史にとって将来の欧州の方向性を占う都市のひとつである。二〇二二年に亡くなった映画界の伝説ジャン＝リュック・ゴダールは、『アワーミュージック』（二〇〇四年）で、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ紛争（一九九二―一九九五年）後のサラエボを舞台に、紛争十年後の街の傷跡とそこに国際的な文化人が会議に集う姿を描き、平和にとって映像で何が可能かを多声的に問い直した。紛争から二五年、独立から一五年を迎えつつあったコンボのプリシュティナで開催されたマニフェスタ14は、アーティストや市民が集い、ともにバルカン半島を超えた戦争と平和について振り返りながら、語り合い、将来の街や国のあり方について考える場として構想されている。

クリエイティブ・メディアーターを務めたキャサリン・ニコルズ（オーストラリア出身、ベルリン在住、美術・文学研究、キュレーター）は、マニフェスタ14のテーマを、文化を超えて物語を語る様態の探究と定め、「重要なのは複数の世界、ひとつの世界、さまざまな世界。いかに物語を別様に語るか (it matters what worlds world worlds: how to tell stories otherwise)」というコンセプトを掲げた。そのもとで一〇二人のアーティストによる二五の場所への「芸術的介入」が展開した。それらは、かつての五つ星ホテルから、オスマン朝時代の公衆浴場ハマムのような歴史遺構、社会主義

時代の若者向けスポーツセンターや商業ビルや記念碑のある広場、レジスタンス戦没者墓地、図書館、大学のアートギャラリー、映画館、民族博物館や国立博物館、かつて新聞社が入居しその後クラブハウスとして使われたこともあるオフィス、煙突のある煉瓦工場、鉄道の線路跡や国



図3 グランドホテル・プリシュティナの9階の展示室から街の眺望が見え、展示会場を確認できる。右手奥には国立図書館。

境沿いの河川までさまざまであり、おおむね紛争で傷ついた建物 (warthitectureとも呼ばれる) や、社会主義から資本主義への移行によって使用されなくなったまま放棄された公共施設を再活用するための将来的なヴィジョンをもって芸術的介入が行われた(図3)。

1、民営化される都市空間への芸術的介入

マニフェスタ14は、事前調査としてタリンの建築事務所カルロ・ラティ・アンソニエイトがAIを使った都市の調査を行なっている。現在近隣からプリシュティナまで移動するには車を使うしかなく、公共交通はバスのみである。そのせいで市内は交通渋滞や車の路上



図4 都市中心部の目抜き通りは綺麗に舗装されカフェが並ぶ。



図5 市。所々にアルバニア人向けのモスクがある。

駐車が多い。綺麗に舗装されたショッピング・ストリートが街の中心を横断しているが、そこから少し外れると土埃が舞う路地や市が現われる(図4、5)。都市調査では、プリシュティナ大学の学生が二〇二一年の九月に街を散歩し、自転車や自動車で移動しながら交通ネットワークを調査した。そこで集められたデータから、通りでの活動や空き地や使われなくなった空間などのデータをAI解析した。都市調査をまとめた冊子『パブリック・アフターオール』にはデータ解析の結果が地図上に点描されている。周辺地域からはアクセスのための移動時間、公共空間の減少、忘れられた文化遺産、緑地、多様な機能をもつ空間、郊外との連結などがデータ化され視覚化される。

そこから街全体の歩行路の再検証が行われた。一九七〇年代に構想されたが実現しなかった歩行橋の計画を見直し、使われなくなった鉄道の線路を緑の回廊と名付け、中心街の周辺を移動できる通路としての活用を目指して、ベンチや並木道などが加えられた(図6)。これらはビエンナーレの期間だけ一時的



図6 線路跡に介入しベンチが設置された緑の回廊。

次に、プリシュティナ大学の学生が参加する都市介入が行われた。まずはカフェ文化を中心に商業的な活動を地図化しながら、都市の集合的記憶を構成する歴史遺産を際立たせ、誤用されている公共空間を可視化していく。そのために、今後都市介入する場所の地面を黄色いペンキで塗ることから始められた。建築家と学生たちは近隣住民とおしゃべりをしながら、いつの間にか駐車場として使われるようになり閉鎖された公共施設の庭や工場を、その来歴を聞き取りつつ介入の可能性を探る。介入する場所の地面には再活用される場所への動線として矢印が塗られることによって住民の反応が引き出され、「軽いタッチの黄色は、確固とした変化」(前書、二〇二頁)を促したという。

に利用されるものに過ぎないが、その後の恒久的な変化に向けて、イベント後も調査データはオープンソースとして利用され、今後の都市開発に活かされる。

このようなかつて社会主義時代に公共空間だった場所が、国家解体後、民営化によって郊外からの都市へのアクセスのための駐車場に変質していったプリシユティナの状況を象徴するのが、若者とスポーツ館である。この場所は、かつては国营ギャラリーが置かれていたこともあるが、現在は廃墟となり地階の空間が駐車場としてのみ使われている。その場所への芸術介入で、異なる過去と未来への想像力が付け加えられた。韓国出身のイ・ブルは、かつて室内の体育館となっていた空間の天井に、メタリックに輝く巨大な飛行船のオブジェを吊るしている（図

7）。この飛行船は、地階に駐車するたくさんの自動車と呼応しながら、いかに社会主義時代の連帯という夢が、個人の成功を優先する資本主義へと変質してしまったか（ドイツの飛行船ヒンデンブルク号が一九三七年にアメリカ、ニュージャージー飛行中爆発事故を起こしたこと



図7 Lee Bul, Willing to Be Vulnerable
-Metalized Balloon V4, 2015/2020.

が参照されている）、そしてこの場所を再び公共の場として想像し直す可能性を示唆している。こうした社会主義時代の連帯としてのスポーツへの熱狂については、かつての五つ星ホテルを改装したメイン会場に展示された一時間ほどの映像作品《ユーゴスラヴィア、いかにイデオロギーが私たちの集合的身体を動かしたか》（二〇一三年）においても回顧されていた。セルビアのベルグラード出身のマルタ・ポビヴォダは、一九四五年から二〇〇〇年までの映像のファウンド・フーテージを使いながら、若者の労働活動やパレードやスポーツイベントがいかに時代とともに変質していったか、いかに集団的な連帯が放棄され、ナシヨナリズムや個人主義や資本主義による統合によって変わっていったかを生き生きと描き出している。またボスニア・ヘルツェゴヴィナのロマの街ルジカを出自とする女性セルマ・セルマンは、《メルセデス・マトリッククス》（二〇一九年）で、男たちとともにメルセデス・ベントンを解体するパフォーマンクス映像を展示している（図8）。観客は、解体された車のシートに座ってその記録映像を鑑賞することができる（彼女は同じ



図8 Selma Selman, Mercedes Matrix, 2019

くロマの美術家にも注目したドクメンタ15にも類似の作品で参加している)。こうした作品に、コソボの都市の文脈を超えて、紛争後のバルカン半島の地域が共通に抱えている公共的で集団的な身体性の喪失が再検証されていると言えるだろう。

グランドホテル・プリシュティナでは、映像インスタレーションだけでなく、写真・絵画・彫刻などの立体的オブジェや写真が、ホテルの半分の客室の壁や天井を抜くことによって美術の展示空間として活用され、ショップと案内を兼ねた入口カウンター、レジデンスとして活用された地下室やかつて要人用客室があった一、二階、さらに上がるると三から九階のフロアに、今回の参加作家のおよそ半数のアーティストの作品や芸術的介入のプロジェクトが展示された。

それぞれの階には「物事に関する大きな図式」というテーマで、「変容」「移民」「水」「資本」「愛」「エコロジー」「思索」というコンセプトによって数点ずつ芸術的介入が選ばれている。たとえば「変容」ではエレベーターのロビーには六つのディスプレイが置かれている(図9)。アルバニアのポグラデックを出自とす



図9 Vangjush Vellahu, Fragments I - Where stories cut across the land, 2015-2018.

るヴァンギユシユ・ヴェラフは、欧州と旧社会主義国などの境界に位置し紛争を経て自治権を有する地域(アブハジア、北キプロス、ナゴルノ・カラバフ、トランスニストリア、南オセチア、コソボ)を旅し、その風景や荒廃した建築物や人々をその傷跡とともに記録している。またバレスチナ出身のエミリー・ジャーシルはベツレヘムの実家の近隣におけるイスラエル軍との衝突による変化を、フォレンジック・アーキテクチャー代表のエヤル・ワイズマンへのビデオレターを通して綴っている。あるいはベトナムのサイゴン出身のトゥアン・アンドリユー・グエンは、戦争終結後も一二人人が犠牲になっっている地雷除去の映像を通して、傷ついた土地の回復力を描く(彼は他の作品で同年のベルリン・ビエンナーレやあいち国際芸術祭でも注目された)。またクロアチアのザグレブ出身のハナ・ミレティチは、さまざまな地域で二〇一五年から行ってきたシリーズとして、プリシュティナを調査して、建築物のひびを写真に撮り、その割れ目の傷を癒すように、地元のリールを用いた手織りの布地を漫画のばんそこのように展示壁面に貼る(図10)。



図10 Hana Miletic, Materials, 2020-21.

ホテルでの展示では、このような国際的に活躍する作家の作品を通して、紛争の傷跡からの回復や現在のグローバルな資本主義を超えた愛やエコロジーの可能性を、より惑星的に思索する視座が与えられる。と同時に、すでに述べたようにバルカン地域のアーティストや忘れられたコンボの芸術も多く展示されていて、ローカルな文化実践やネットワークを再構築することによってこそ現在のグローバルな危機への方策が提案される。とりわけ一、二階は、このホテルの歴史とローカルな地域の美術活動の関係を問い直す試みとなっており、特筆しておきたい。

2、ローカルな文化実践の再構築

グランドホテル・プリシュティナは、かつては社会主義国家に支えられ、世界各国から来訪した要人が宿泊し、名高いアートコレクションを有していたが、二〇〇八年の民営化以後にそのコレクションは失われたり盗まれたりした。そのことを踏まえ、六名のコンボ在住の若手の美術家たちが、ホテルの壁面を作品で飾った(図11)。さらにプリシュティナ出身の写真家のマリンダ・ホジャは、ホテルの従業員への聞き取りやアーカイブ調査を通して、かつてホテルに展示されていた絵画やタペストリーや彫刻を再展示した写真を撮影し、まさにその場所に写真を展示して、国の変化を象徴するホテル

の記録に取り組んでいる(図12)。さらに別の部屋ではセルビア体制化の一九九七年にアルバニア系の美術家によってベオグラードで行われた展覧会を再検証したオーラル・ヒストリーの映像も展示されている(図13)。あわせて旧市街にある空間を改装したギャラリーで当時のアーカイブが展示され、コンボの現代アートの歴史について議論する機会が創出された。ホテルの別



図12 Majlinda Hoxha, Sofra. Gielosh Giokaj, 1978, Photo: 2018.



図11 往年の面影が残るホテルの居間には地元
の美術家の作品が展示される。

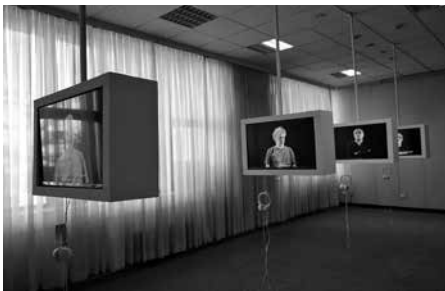


図13 Foundation17, PÊRTEJ - Archiving
Transition, 2022.

さらに別の部屋ではセルビア体

の階の展示室には、戦後に活躍した抽象画家や風景画家の作品も展示され、地元近現代美術史の一端が垣間見られる。

このようにローカルな文化芸術の歴史とそのコミュニティの再構築が、マニフェスタ14の大きな課題になっている。特に大学に併設されているコソボ国立ギャラリーでは、一九六〇年代から現在までの展覧会カタログ、記録、出版物の切り抜き、手紙、草稿、写真などを通して、忘れられた個人や集団を振り返り、コソボの美術史を国際的な現代美術史の文脈に位置付け直す⁸⁾としている(図14)。フェミニズム的な視点からのバルカン半島の女性芸術家を掘り起こす動きも顕著である。リ・アクト・フェミニズムは、一九六〇、七〇年代のフェミニズムやクワイアーなどジェンダーに関わるパフォーマンスのオンライン・アーカイブのためのプロジェクトであり、本展のためにウェブサイトを再構築した⁹⁾。その展示に併設されたセカンダリー・アーカイブは欧州の周辺地域の女性の声を集めるオンライン・プラットフォームで、二〇二一年の三月から始められ、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ポーランドが



図14 An Archive in the Attic: Informator On the National Gallery of Kosovo.

まず取り上げられた¹⁰⁾。二〇二二年にはウクライナ、ベラルーシ、アルバニア、コソボ、セルビアが加えられ、今後は旧ユーゴスラヴィア諸国や旧ソ連諸国に広がる予定である。すでに二〇〇一年にスロベニアの芸術集団IRWINが、インターネットと書籍で、戦後の東欧とバルカン諸国の現代美術の歴史をマッピングしたが、『イースト・アートマップ』(一九九一年―二〇〇五年)、それに女性からの身体性と声が付け加えられることになる¹¹⁾。

さらにマニフェスタ14のためにプリシュティナ、ティラナ(アルバニア)、スコピエ(マケドニア)の一九九〇年代から二〇一〇年代までのサブカルチャーの事前調査も行われ、三分冊の書籍として出版された。先に述べたようにコソボ市民はビザ無しでは出国ができず国際的な交流は制約されている一方で、出稼ぎのための国外移住者の数も多い。そうした状況下で、周辺のバルカン諸国の若者を呼び込み、ネットワークを構築する試みも重要である。ソフィア(ブルガリア)の現代アート・インスティテュートは、ブルガリアとコソボの作家がともに創作し議論し共通の場を生み出すためのプラットフォームを二〇二〇年から行い、大学の芸術学科のギャラリーでも空間の政治学を探求する協働の展示が展開した。

このようにコソボから国境を超えて西バルカン半島に広がる文化芸術の歴史の見直しが行われたが、マニフェスタ14で語られる物語は、芸術コミュニティだけに留まらない。より広い市民参加と語り

りの場を開くことも目指されている。

3、記憶の異なる語りを生み出すための場の創出

物語実践センターは、異なる語りを促すために改装された施設である。元のヒブジ・スレイマニ図書館は、二〇一六年に閉鎖されていた。この施設は、マニフェスタ14のエデュケーションチームを中心に、新しい語りを引き出す場所として構想され改築された。ビエンナーレの終了後も施設は続けられ、芸術文化の行政組織によって運営される予定である。建物にはカフェとして利用できる庭があり、会議室、ギャラリー、ポッドキャスト録音スタジオ、子供ミュージアムを備えていて、教育活動やプレゼンテーションやパフォーマンスを行うことができる(図15)。会期中には週末のトークが行われ、地元の人々から物語を聞く「ラジオ別様に」が発信された¹²⁾。数人のアーティストや書き手がワークショップの企画を行っているが、とりわけ著者が注目したのはヴェルケ・コレクティヴによ



図15 物語実践センターの中庭

る《恋人たちのアーカイブ》である。ここでは、個人的に収集している資料を持ち寄り共有し、それについて語り合い、アーカイブを編纂するための場が設けられた(図16)。展示空間には彼らがアムステルダムから持ち寄った二百の資料が展示されている。さらに人々の語りの場を創出するアーティストによる別の芸術介入として、ロンドンとベルリン在住のアリシヤ・ロガルスカは、海外在住のコンボ女性の空きアパートの一室を使って、フェミニズムの活動家とともにコンボの女性の抱える状況についての映像を展示して、月曜日は展示を閉めてコンボの女性のための法的助言とカウンセリングを提供する活動を行なった。

こうしたコンボ固有の文化アーカイブの構築や別様に人々が語るための場の設定の背景には、アルバニア人の根深い家父長制もあるが、同時にユーゴスラビア時代にセルビア人からの抑圧からアルバニア語が公教育から排除された歴史を思い起こす必要がある。コンボ国立図書館は、一九八九年にコンボが自治権を失った際に、アルバニア人の図書館員が解雇され、学生もアルバニア語を学ぶことが



図16 Werker Collective, Amator Archives, 2022.



図17 Yael Davids, Learning to Read - A Physical Act, 2022.



図18 Hertica School Houseの一階に写真とオーラルヒストリーが展示された。

禁止され、多くのコレクションが燃やされ廃棄された。また図書館は、ユーゴスラビア内戦時には、難民の避難所として活用されたり、ユーゴスラビア軍の司令センターとして使われたりしていたことがNATOによる占領時に明らかになった。イスラエル出身のヤエル・デイヴィッツはそのような歴史ある図書館全体を傷つけた身体に見立てて、傷んだ本、図書館の図面、椅子に修復を施して展示するとともに、その椅子を使って身体的なエクササイズを行うワークショップを参加者とともに行った(図17)。

さらに市中から離れた小高い丘の上にある集合住宅ハーティカ学びの家は、一九九〇年に公職を追われた教師や高校や大学への立ち入りを禁止されたアルバニア人学生が集い、オルタナティブな教育

を行う場所として使われたが、その場所も一九九九年の紛争で廃墟になった(図18)。その後この場所を保存して博物館にしようとする動きがあるという。今回は、瓦礫が地面に散乱する空間が残されたまま、ひびや傷跡が痛ましい壁面に、当時のアーカイブ写真が展示され、十名のオーラルヒストリーの映像が、かつての教室に設置されたディスプレイを使って上映された(図19)。ここでは、当時の教室の様子から、紛争時の恐怖など、二十年前に学生や教師だった人々の視点から振り返られており、今回のマニフェスタ14の感情的なハイライトになった。

ドント・スタート・ナウ

廃墟となった教室から、街に向かって小高い丘を徒歩でゆっくり降りていくうちに、改めてプリシュティナの風景を見渡すことができた(図20)。その眺望から、赤煉瓦の屋根が美しい景観を生み出していることに気づく。この赤煉瓦は、コソボのアルバニア人のア



図19 床には瓦礫が散らかり、当時使われた机や黒板が残されているが、展示空間として整備されていることも感じる。



図20 プリシュティナの眺望。赤煉瓦の屋根が特徴的である。



図21 赤煉瓦工場のカフェ・バー

イデンティティと生を表すものだろう。丘を降りたところに、中心市街地の周縁に位置する煉瓦工場がある。戦後すぐ一九四七年に開設された煉瓦工場は、プリシュティナの多くの建物のための煉瓦を製造してきた。一時期、民間に運営されたが、二〇二一年からプリシュティナ市の管轄になり、都市のエコロジーを学ぶセンターとしての再活用が計画されている。ベルリンで活動するラウムラボア・ベルリンを招待して、二週間のサマースクールなど、子どもから大人まで参加できるワークショップが会期中に催され、将来の活用の端緒が切られた。

平日に会場を訪れたので、数人の近隣の年寄りがお喋りをして
いる以外には、若い男性が仮説のプールの近くでビールを提供し

てくれたほかは閑散としていた(図21)。広い工場を散策して
と、それぞれの場所にはワー
クショップの道具や成果物が
置かれている(図22)。その
ひとつに「工場は決して眠ら
ない」というメッセージが掲
げられて、壁面に、工場の地
図と工場の歴史を表す年表が
書かれた場所があった。年表
の奥には「では次は？」とい
う文字が続く(図23)。今に
も崩れ落ちそうな無人の廃墟
の先には、焼却炉跡があるだ
けだが、この廊下の先を想像
し、市民で新しい生活と連帯
の空間を切り拓いていくため
のエクササイズこそが、今回
のマニフェスタ14だったので
はないか、と旅を振り返って
思う。

本稿でその一部について述



図23 画面外右手に工場を俯瞰したイラストが壁面に描かれ、左手には工場の歴史が年表化されている。奥には「WHAT'S NEXT?」の文字。



図22 ワークショップの工房には工場の模型を中心に、木材や画材などが整理されて設置されている。

べたように、プリシュティナでは、マニフェスタ14による様々なメディアーションによって、実践的な都市介入を行いながら、ローカルな文化芸術の再認を促し、多様な市民参加の別様な語りを通して、ともに外傷を癒しながら、将来の街づくり、国づくりに向けた取り組みがすでに始まっていた。数日の滞在だったが、数年後の変化をかならず見届けたい、とこの小さな街や人々への愛情を胸に抱きながらプリシュティナを後にして空港に向かった。¹³⁾

隅々まで丁寧に作り込まれた国際展と暖かい街や人々への著者の賞賛をよそに、人々の口から察するに、国際的な芸術展示よりも世界的歌姫デュア・リパの来訪に世間は湧き立っていたようだ。ロンドンでコソボ出身のアルバニア人の家庭に生まれたデュアは、アルバニア語で愛を意味する名前を授けられた。彼女は、プリシュティナ郊外で行われた音楽フェスティバルのために両親と帰郷していて、グラントホテルを中心にスポーツセンターのイ・ブルや公共浴場の塩田千春の展示にも訪問したようだ¹⁴⁾。コロナ禍の世界的ヒット曲「ドント・ス

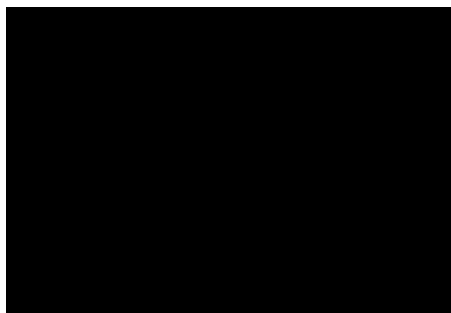


図24 Doruntina Kastrati, Ring the Bells My Land, 2017/2022に訪れるデュア・リパ。写真：©Manifesta14 / Fret Ahmet.

タート・ナウ」(二〇二〇年)の力強い声が、いまも頭のなかでこだまし続けている。「私はもう全然大丈夫。前に進んだのよ、怖いくらい。あなたが私を捨て去った場所には、もういないわ……いままら私のことなんて気にし始めないで」。

*本調査は、文化庁による大学における文化芸術推進事業「街に介入する芸術、その公共性の議論を促すメディアエーター養成プラットフォーム」の調査の一環として行われた。

*本稿の一部については、広島芸術学会第36回大会シンポジウム「広島まちなか探訪——野外彫刻、モニュメントを中心に——」にて紹介した。

(いしたに・はるひろ／広島市立大学)

註

- (1) 英国の美術雑誌フリーズは二〇二二年の展覧会ベストテンにマニフェスタ14を選出している。 <https://www.frieze.com/article/top-ten-shows-europe-2022> (最終閲覧:二〇二三年六月一〇日)
- (2) <https://manifesta.org/> (最終閲覧:二〇二三年六月一〇日)
- (3) OMA, *Palermo Atlas*, Humboldt, 2018.
- (4) 当時西側の広告代理店のプロバガンダが指摘されたように、紛争当事者同士で食い違う経緯について記述するのは難しい。コソボおよびユーゴスラヴィア紛争に関する日本の記者及び研究者の考察も多い。NATO空爆後を現地取材した木村元彦は、コソボ解放軍(KLA)による武力闘争の結果、コソボ領内のセルビア人への迫害や拉致によって難民や失踪も生じたことを指摘する。木村元彦「終わらぬ「民族浄

化」セルビア・モンテネグロ』集英社、二〇〇五年。国連平和維持軍の駐留によるセックスクラブの増加と軍事請負企業による人身取引、孤児の搾取や犠牲についての指摘は次。シドハース・カーラ『性的人身取引―現代奴隷制というビジネスの内幕』明石書店、二〇二二年、二二九―二三五頁。

(5) 廣瀬陽子はNATOおよび欧米諸国による「未承認国家」だった Kosovo 独立支援が、旧ソ連圏の未承認国家をめぐるロシアと欧州の対立に繋がっていると指摘している。『未承認国家と覇権なき世界』NHK出版、二〇一四年。マニフェスタ14では、セルビアとKosovoの国境地域出身のキュレーターが、ウクライナ北東部ハルキウ出身でサラエボ在住の美術家らと共同で、社会主義時代の鉱山労働者のモニュメントをモデルにワイヤーフレームのレプリカを制作し、それを国境沿いの川に浮かべ、両国側から川遊びを楽しめる空間に変えた(『モニュメントなしのヨーロッパ』二〇二二年)。ウクライナ北東部はドンバスとともに工業地帯として社会主義時代に発達したが、紛争下の国境での芸術的介入はウクライナ人とロシア人の状況にも重ね合わされている。また東ウクライナ出身でキーウ近郊に在住のアルヴティナ・カヒゼは、独立運動ユーロマイダン(二〇一三―二〇一四年)にも参加したが、ウクライナの植物の生態と別の種の侵入を観察し、それをその後のドンバス紛争にも重ね合わせている。

(6) 「民族浄化」を戦争犯罪として処罰することを目指した旧ユーゴ戦犯法廷について判事として参加した多谷千香子は報告している。『民族浄化』を裁く―旧ユーゴ戦犯法廷の現場から―岩波書店、二〇〇五年。ユーゴスラヴィア紛争時の性暴力については次。ジョン・ヘーガン『戦争犯罪を裁く(下) ハーク国際戦犯法廷の挑戦』NHK出版、二〇一一年。民族的ナショナリズムと距離を置いていたプリシュティナのフェミニズムの活動と課題については江口昌樹『ナショナリズムを超えて―旧ユーゴスラヴィア紛争下におけるフェミニストNGOの経験から』白澤社、二〇〇四年を参照。

(7) *Public After All / Hedwig Fjien: translation Gazmend Bërlajoli, Pristine; Maniësta 14 Pristine, 2022; Maniësto 14 Prishina :*

coordinated by Emilia van Lynden. [et al] : photographs Athle Mulla [et al] - Pristine; Maniësta 14 Pristine, 2022.

(8) メディエーターツアーでは、アメリカ政治学を学ぶ若い女学生と芸大生と対話型鑑賞を行った。図書館から大学、大学のギャラリーなどを案内されたが、特に最後に彼女がアルバニア系セルビア人であることから今回のメディエーターとして参加したことを聞いた。セルビアの写真展でアルバニア系の芸術家の表現に右翼から抗議があったことなど、両国の緊張感と複雑な民族問題に気づかされ有益な体験だった。

(9) <https://www.reactfeminism.org/> (最終閲覧二〇二三年六月一〇日)

(10) <https://secondaryarchive.org/> (最終閲覧二〇二三年六月一〇日)

(11) *East Art Map: Contemporary Art and Eastern Europe*, Afterall Books, 2006.

(12) manifesta4.org/radio-otherwise (最終閲覧二〇二三年六月一〇日)

(13) 滞在したホテルの女将は、かつて日本の旅行会社でも働いてKosovoへの旅行をコーディネートしていたことがあるらしく、コロナ後自分のホテルを運営しているのだと言う。タクシートの運転手からふと在日韓国人について聞かれた。アルバニア系Kosovo人からすると、セルビア人とアルバニア人の関係は日本人と韓国人の関係に重ねられるかもしれない。

(14) <https://manifesta4.org/news/dua-lipa-visits-manifesta-14-prishina/> (最終閲覧二〇二三年六月一〇日) ユェマ・リップは、*чыууи #SchMeFree #VisaForKosovo*などの難民とKosovo人の移動の自由を求める政治キャンペーンを始めたところだった。